

鈴木ビネー知能検査改訂への道：  
心理検査出版社社員へのインタビューから<sup>1</sup>

鈴木朋子<sup>1</sup>

The challenge to revise suzuki-binet test in Japan

Tomoko SUZUKI<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 横浜国立大学教育人間科学部

<sup>1</sup> Yokohama National University, College of Education and Human Sciences

## はじめに

知能検査は、心理学における重大な「発明」である（佐藤・溝口、1997）。知能検査の歴史は、1890年にキャテル（Cattell, J.M.; 1860-1994）が、精神物理学的な一連の実験に対し *Mental Test* を使用したことに始まる。現在の知能検査のように、様々な課題が難易度順に配置される形式になったのは、1905年にフランスのビネ（Binet, A.; 1857-1911）とシモン（Simon, T.; 1873-1961）が発表した「異常児の知的水準を診断するための新しい方法（*Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux*）」以降である。ビネ・シモン式知能検査は、1908年、1911年に改訂されて *MA*（*Mental age*: 精神年齢）の概念が導入され、各国で改訂され発展した。代表的な改訂版には、1937年にアメリカのターマン（Terman, L.M.; 1877-1956）が *IQ*（知能指数）を導入した「スタンフォード改訂増補ビネー・シモン知能測定尺度」があげられる。「スタンフォード・ビネー」として知られるこの検査は、ビネ・シモン知能検査 1908年版を原版としていたが大幅に改訂が加えられており、1937年以降の3度の改訂の過程で偏差知能指数（*DIQ*）、因子構造モデルが導入された（中村・大川、2003）。

ところで日本では、ビネ・シモン知能検査が発表された1905年から比較的早い時期に検査が紹介された。だが、複数の改訂が発表され、標準として使用される改訂版が定まるまでには時間を要した。現在も使用されている改訂版は、田中寛一による改訂を原本とした田中ビネーと鈴木治太郎による改訂を原本とする鈴木ビネーである。なお、ビネ・シモン式知能検査の本邦改訂の詳細については、田中ビネーの歴史（中村・大川、2003）、鈴木ビネーの歴史（石川・高橋、2008）、久保良英によるビネ式知能検査の改訂（鈴木、2003）、三

---

<sup>1</sup> 本研究は、科学研究費補助金（22730535「知能検査デジタルアーカイブ」の構築、15K04117「発達検査デジタルアーカイブ」の構築）の助成を受けたものです。

田谷啓<sup>だやひらく</sup>による改訂（鈴木・岡村・木下、2009）、三宅鑛一によるビネ・シモン式知能検査の紹介（鈴木、2016）がまとめられている。

鈴木治太郎は、学業不振児を集めた大阪府師範学校附属小学校「教育治療室」での実践を経て知能測定法の開発に着手した。1922（大正 11）年、66 問からなる『大阪児童智能測定法案』を発表、16,059 名を対象に標準化実験を重ね、1936（昭和 11）年に『实际的個別の智能測定法修正増補版』が発行された。対象は 2 歳から 20 歳まで、検査項目は、ビネ・シモン式知能検査 1908 年版及び 1911 年版、ターマン、クールマンが考案したものほかに鈴木自身が考案したものもあった（石川・高橋、2008）。1941（昭和 16）年、全検査 76 問、知能年齢 23 歳までに拡大され、1948（昭和 23）年には「IQ 算出便覧」を備えた改訂版が発表された。鈴木ビネーの誕生である。1956（昭和 31）年、内容的には 1948 年の昭和 23 年修正増補版と変更はないものの、『实际的個別の智能測定法<昭和 31 年版>』が刊行された。鈴木治太郎による鈴木ビネーの最後の改訂とされている（中村・大川、2003）。

2007（平成 19）年 3 月、1948 年以来で初めての改訂が行われ、『改訂版・鈴木ビネー知能検査』として発売された。項目数は 72 問、小宮三彌<sup>2</sup>・塩見邦雄<sup>3</sup>・末岡一伯<sup>4</sup>・置田幸子<sup>5</sup>による改訂であり、古市出版より出版された。

知能検査開発者へのオーラルヒストリーを行う中で、出版社員として鈴木ビネー知能検査改訂に携わった古市出版・古市龍雄にインタビューを行う機会を得られた。古市龍雄は、1940（昭和 15）年、東京で誕生。早稲田大学政経学部卒業後、日本文化科学社<sup>6</sup>に入社。代表であった茂木茂八<sup>7</sup>の指示で心理学を勉強、正規分布曲線を描くなど検査の仕事に携わるうちに、知能検査に興味を抱くようになった。日本文化科学社を定年退職後、小宮三彌よ

---

<sup>2</sup> 小宮三彌（こみや みつや）。九州大学大学院教育学研究科教育心理学博士課程修了（教育学博士）。愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所研究員、熊本大学教育学部助教授、上越教育大学学校教育学部教授、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程教授等を経て、2016 年現在は健康科学大学健康科学部特任教授。上越教育大学名誉教授、健康科学大学名誉教授（健康科学大学、2016）。

<sup>3</sup> 塩見邦雄（しおみ くにお）。教育学博士（京都大学）。兵庫教育大学名誉教授。相愛大学人間発達学部教授、人間発達研究所所長を経て、2016 年現在は大和大学教育学部教授。兵庫教育大学名誉教授（ナカニシヤ出版、2016：大和大学、2016）。

<sup>4</sup> 末岡一伯（すえおか かずのり）。北海道大学教育学研究科修了。北海道教育大学名誉教授。北翔大学教授（古市出版、2016）。

<sup>5</sup> 置田幸子（おきた さちこ）。置田児童教育研究所長（古市出版、2016）。

<sup>6</sup> 東京大塚にある心理検査および教育図書出版社。1948（昭和 23）年に日本教材研究所として設立され、同年に出版部門は株式会社日本文化科学社に改称（研究機関は、日本教材研究所の名称のまま附属機関として継続し、後に田中教育研究所と改称し 1959 年に独立）。1965 年には日本適性研究所を設立。WAIS、WISC などの心理検査の出版、心理検査講習会の開催を行っている（日本文化科学社、2016）。

<sup>7</sup> 茂木茂八（もてぎ もはち：1910-1989）1932（昭和 7）年、東京高等師範学校付設第一臨時教員養成所卒。東京府立第七高等女学校教諭等を経て、1948（昭和 23）年、日本文化科学社田中教育研究所の設立に参画し専務となる。後に日本心理適性研究所所長。専門は教育心理学、知能検査（大泉、2003）。

り鈴木ビネー改訂への協力を依頼され古市出版を設立、2007年に改訂版鈴木ビネーを出版した。

インタビューは、知能検査・発達検査開発者へのオーラルヒストリーの一環として行われたものだが、インタビューイの話の流れを遮らずに聴くことを重視した。鈴木ビネー改訂以外の出版業界の話、個人的な話も含まれているが、当時の日本の社会や学界の様子を伝える貴重な資料になると考え、省略せず掲載する。トランスクリプトは、古市龍雄の校閲を経たものである。人物名の尊称は論文の慣例に従って省き、呼称は当時の表記を尊重した。

### 古市龍雄へのインタビュー

インタビュー日程：2012年12月18日

場所：横浜ベイシェラトン ホテルラウンジ

インタビュアー：鈴木朋子

### 鈴木ビネー改訂の経緯

古市：日本文化科学社に勤めていた時に、田中研究所に田中ビネーの著作権が移ったんです<sup>8</sup>。日本文化科学社には、ウェクスラー法があったのですが、ビネー法と同じように使うわけにいかないの、やはりビネー法があったほうが便利だということになりました。それで1度白羽の矢を立てたのが、鈴木ビネーだったんですよ。そのときに鈴木ビネーのマニュアルを買ってみましたら、「欠所発見」なんか鼻がないとかですね、口がないとかって、その当時でも、とんでもないような内容のものが堂々と出ているものですから<sup>9</sup>。

—その、とんでもないという話になったのは何年頃だったのでしょうか？

古市：30年ぐらい前になるんじゃないでしょうか。「読売新聞」、「毎日新聞」なんかの全国レベルの新聞の社会面のトップ記事に、東京都の児童相談所が「この鈴木ビネーはもう使えないから廃止」とか。絵が出て、今どき、こういうようなもので、子どもの知能を測ろうとしていると話題にもなって。ただもう、普通はそこまでたたかれたら、急ぎ直すとかが廃版にするとか、通常はあってしかるべきなんです。ただ、他の会社のことですから、その当時は何をしているんだろうな、としか見ていなかったんですけども。日本文化科学社から田中ビネーがなくなったときに、鈴木ビネーがそんなことですから、どうされるつ

---

<sup>8</sup> 「田中ビネー」は、1947（昭和22）年に『田中びねー式知能検査法』として世界社より出版、1954（昭和29）年より日本文化科学社で『田中・びねー式知能検査法』として改訂版が出版された。1970（昭和45）年の『新訂版 田研・田中ビネー知能検査法』以降は、田研出版から出版されている。ここでは、日本文化科学社から田中教育研究所が独立した時に、田中ビネーの著作権が移動したことを述べている。

<sup>9</sup> 鈴木治太郎『実際の個別的な智能測定法』、第22問（5～6歳）「絵の中の遺漏の発見」のこと。問題では、「遺漏のある4枚の絵」（①眼のない顔の絵、②鼻のない顔の絵、③口のない顔の絵、④両腕のない全身の絵）を示し、抜けているところを探るように教示する。

もりなのかなと思って。東洋図書に当時、1度お訪ねしたことがあるんですよ。永田文夫さん<sup>10</sup>という方が東洋図書の代表者の方で、2代目のお父さんの跡を継いでいらした方で、作詞家でいらっしゃるんです。聞いてみましたら、永田さんのお父さんの時代に鈴木治太郎先生から濃いつながりで「こういうビネーというのを出すので、おまえのところで出してくれないか」という話になって、鈴木ビネーが出されたという経緯があるんです。当時、出版社では息子さんが、検査についての知識もご存じないままに、出版跡継ぎをただけですから、「これでこういう問題がいろいろ起きましたね?」「改訂は」とうかがったら、「あ、私ども改訂ということ、そういうことまったく考えてません」で。「そういう学者の方も知りませんし」って言うから、初めは「もしお宅でご存じなければ学者の方を紹介しませけれども、おやりになりませんか?」と言ったら、「いやいや、私どもはやるつもりはありません」と。

—うーん。

古市：という話が1度ありまして、それでこれは向こうでそのまま出されているんじゃあ、改訂版を持っていっても承知してくれるわけないだろうなと思ひまして、鈴木ビネー法は断念したんです、日本文化科学社では。やがて私も会社を退職しまして、別のことをゆっくりやりたいなと思ひておりましたところが、日本文化科学社時代に存じあげていた、著者の一人の小宮先生が東京へいらして、呼び出しがかりまして。鈴木ビネーを（大学の）授業で使っているんだけど、とにかくこれが非常にやりやすく便利なんだけど、最近、子どもや学生たちが、例えば古市君、こういうこれ（用具）を見せると、考えるより笑っちゃうと。「先生、何ですか、これは?」って言って。それはそうでしょうね。まず、こういう七輪が分からない<sup>11</sup>。

—そうですね、七輪は分からないですよ、家にないですから。

古市：とにかく古すぎるので、これを直したものをつくりたいと。私は「出版社のほうに話をしていただけませんか」と言ったのです。私は自分では出版するつもりはまったくなくて、考えてもいなかったものですから。ただし、その東洋図書さんのところへ行ったけれど、こういう状況で駄目だと。あと問題なのは出版元もその治太郎さんは亡くなられているけれども、そのご遺族の方に著作権がありますから。

—そうですね。著作権は遺族にありますよね。

古市：ただし、どうも私が今まで話を聞いていると、この鈴木治太郎さんはもう亡くなられたんだけど、鈴木ビネーについての信奉者の方がいらして。それが別名「鈴木ビネ

---

<sup>10</sup> 永田文夫、1927年大阪生まれ、京都大学卒業。音楽評論家、訳詞家。日本訳詩家協会会長。（ブルーレディオドットコム、2013）

<sup>11</sup> 鈴木治太郎『实际的個別的智能測定法』、第18問（4～5歳）「用途によって定義」では、③「火鉢」の説明が求められている。また、第4問（2～3歳）「絵の中の事物を列挙」、第29問（6～7歳）「絵の内容の叙述」で用いるカードでは、①家の部屋の絵、②川とボートの絵、③新聞を見ている絵で構成されるが、①では、母親が火鉢のそばに座って、子どもが泣き、猫が寝ている。

一を守る会」という会<sup>12</sup>、私はそのように聞いておりましたんですけれど。その会が頑として改訂はたぶん許さないはずだという話を聞いていたんです。が、それでとにかく駄目ならもう駄目で「小宮先生、やっぱり駄目でした」ですむと思ひまして、鈴木治太郎先生のご遺族のお宅へ行ったんです。

一ええ。

古市：行ったら、ご息さんがいらっしゃいまして、実はこういうような話があるんですけれども、改訂版をということを望んでいらっしゃる。もしよければ、改訂作業を手伝ってもいいという学者の方がいらっしゃるんですけれども、いかがでしょうと。ちなみに東洋図書さんでは、「改訂版は私のほうで出すつもりはないのでおやりになるならば、鈴木家のところにお話をしてやってください」というお話でしたので、まあ問題は自宅のほうで、それをご承諾いただけるかどうかだけの問題なんです。実はこの「鈴木ビネー」って名前がそれだけ知られている検査でと、お話をしました。その鈴木治夫さんという息子さんは、高校の理科の先生だったのですが。あとから聞いたら、ほかの出版社でもぜひ改訂版の権利を取りたいということで、鈴木治太郎さんの家に、話を持っていかれたようなんですが、その鈴木治夫さんは学校の教師で、日本の教師の休暇を取って、マレーシアかどこかに勉強がてら、5年間ぐらい行ってらしたらしいんです。そうしたら、鈴木家のそのご息はもうあちらに移住しちゃったってという噂にいつのまにかなっちゃって。改訂を）やりたいという先生方がマレーシアまで追っかけるわけにいかないの、みんなあきらめちゃったらしいですね。それで鈴木ビネー改訂へなかなか結びつかないらしいんですよ。そんなことはまったく私は知らないままに、ある日、鈴木家を訪ねたら、教師の生活を終わられて、もう引退された鈴木治夫さんがいらしたんですよ。それで、その方から、「父がこういう検査をしたって、それだけは知っていますけれども。目の前で、子ども時代から知能検査の実験も、私はやらされましたから、よく知っていますけれども、私はまったく畑違いの分野です。この検査は、東洋図書さんからはもうほとんど売上げがなくって、印税も申し上げるほどのこともないような状況で。それはそれで終わればいいなと私も思っているんですけれども。でも、もしそういう方（改訂を望む人）がいらして、特にやってもらえるんならば、私のほうに何の否やもありません」となり、「それはぜひ一つ、やってください」という話になったわけですよ。それで、例の「鈴木ビネーを守る会」がもう一つ難産であるんじゃないかと思ひまして、それで「その会の人たちが毎年、鈴木治太郎の命日に来ます。だから来月もう1度、古市さん、うちへ来ますから、そこでお会いになって、お話しになったらいいんじゃないですか。たぶん駄目だと言わないと思いますよ、もう皆さん相当高齢になったもんですから」

一そうでしょうねえ。ご高齢ですよ。

古市：現実に今もう、残ってらっしゃる方は1名ぐらい、1名か2名、あとはみんな亡くなってしまわれました。

---

<sup>12</sup> 和神の会のこと。

—そうでしょうねえ。

古市：はい。本当に高齢の方々でしたけど、翌月行ったときに、その方々にお話をしました。そのとき小宮先生もお連れしたんです。学者も一緒に良いと思って。こういうような鈴木ビネーを、あくまでも（鈴木治太郎の）改訂に準じるけれども、ただどうしても現在のものとしてそぐわない問題は直させていただくと。でないこのままの問題ではとにかくどうにもならないということで、「よろしいでしょうか？」ということでお話をさせていただいたら、「もう改訂については私どももこれは今までの鈴木ビネーの役目は一応終わったので、あとは自由にやっていただいてけっこうです」というお話になりました。ですから、急転直下という状況になっちゃいまして。それで一応そこまではできたから、著者の小宮先生も、メンバーの方々にご説明になったので、私は一応お役目はこれでやめさせていただくということで（改訂の）会へお話をさせていただいたら、小宮先生から「入れ」と。私も、一サラリーマンですからね。やはり改訂版といったらば改訂版でやはり、それだけのもの費用がかかるわけですよ。

—そうですね。

古市：ですから、「私は勤めを辞めちゃって、だから先生、それはもう私はできないんです。岡田くん<sup>13</sup>のところではやれますから、必要なところの手伝いだけはしますから」と散々言ったのですが。そのうちに先生が家までいらっしゃって、家内に「とにかくお金はかけない。われわれの編集費とか、出張費のうんぬんとかそんなものはもういっさいいらない」と。……それでも先生、やっぱりこれつくるのに検証実験やったり、本つくったり、どうのこうのってのはかかるわけですから。

—うんうん。

古市：それで、まあ私のうちの家内に何がしかの捻出を許されて、それで出してもらうことになりました。

—え、鈴木ビネー改訂は、個人資産でされていたんですか？

古市：そうです。私個人じゃもちろん駄目でしたけれど、彼（岡田総合心理センター）のところにもいましたので、それで彼のところと分担して出資をいたしまして、それでやっとなることができる形のものになるという運びになりました。ですから、本当にあれよあれよというような状況だったんですけども。

—うーん、びっくりしました。

### **冊子式用具の採用**

古市：ざっと言うとそういうような流れで急に、鈴木ビネーの改訂版が出ることになりました。彼（岡田総合心理センター）ともいろいろ相談しまして。販売というと、全国対象ですから。やっぱりそういう販売網はどういったところに、どういう専門になるかという

---

<sup>13</sup> 改訂版鈴木ビネーの発売元である、「岡田心理総合センター」の代表取締役の岡田泰典のこと。岡田心理総合センターは、大阪市にある心理検査専門販売会社。

のは、私も実は会社にいましたから知っているんですけども、たまたま彼（岡田総合心理センター）のところは全国規模で販売をしていますので、それで彼に販売元になっていただきまして、私のほうが出版元という形にしたんですが。おかげさまで幸いだったのが大阪の彼（岡田総合心理センター）がいてくれて、用具関係のものでしたとか、というのは比較的大阪は問屋筋が多いんです。ですから用具やなんかをつくるのに、比較的つくりやすかったっていうのはあるんです。

—ええ、ええ。

古市：このメンバーのなかに置田幸子先生という方がいらっしゃるんです。この方は、渋谷の三軒茶屋のところにある昭和女子大の相談員のような形で長年お勤めになってらっしゃった先生で。この先生がおそらく、鈴木ビネーを実施された数でいうと、日本でナンバーワンの先生だと思います。

—何件ぐらい実施されたのでしょうか？

古市：約3万数千名。

—すごいですね。

古市：改訂版はいくつか新しい実施法を採用していますが、その一つに問題の提示があります。旧式はカード式になっていますが、改訂版はファイル方式に改めたんです<sup>14</sup>。置田先生のように、検査に熟知された先生は、カード式が良いとおっしゃっていたのですが。

—なるほど。

古市：鈴木ビネーの改訂をやることが決まりまして、それで（旧鈴木ビネーの1948年の改訂より）時間もたっておりますから、ある知り合いの幼稚園の先生方が幼稚園長に了解を得まして、置田先生に実際に一緒に行っていただいて、そこで幼稚園の子どもに実際に今どのぐらいのデータが出るものかの検証実験をやってもらったんですね。（実施の手際は）それはもう見事なもので、パッパッパッパッと実施して、終わるとさっさとしまつて。その手順たるや、見事なものでした。私も（冊子式ではなくカード式を希望する）置田先生に申し上げたんですけども。置田先生のような方が全国に何名いらっしゃると思いますかと。ほとんどの先生はゼロから始まりますから。必ずおっしゃってくるのが、これが（検査用具が）1枚なくなってしまうと。

—そうでしょうね。

古市：なくなったら、1枚ないと大変だと。でも1枚だけを作成することが出来なくて、全部やらなきゃいけませんから、そうするとこの1枚が何千円という価格になってしまう。私ども、よくウェクスラー検査の部品の販売のときに先生方から怒られました。なんでこんなものが1枚何千円もするのって。カード式ではこういうようなことが必ず起きますから。（新版の冊子式では）先生なくなりません、この方式は便利ですと。説得に説得を重ね

---

<sup>14</sup> 旧鈴木ビネーの用具は、一枚一枚がバラバラになったカード式で、封筒に入っている形であった。そのために、一部紛失してしまったり、実施の場面で見つからなかったりすることが多かった。改訂版ではリングファイル式（冊子式）に変更された。

て、こういう形のものに。私も K-ABC を存じてましたので、K-ABC と同じ方式のものに  
というようなことを言ったり、あといろいろ苦勞はございましたけれども。基本的には、  
(旧) 鈴木ビネーで今の時代でも許される問題はすべてそのまま引用しようと。それで今  
の問題で使えない問題については、一応外してということで話しました、欠所発見ですと  
か、あるいは何の問題でございましたかね。

—数えてみたんですが、4問が旧版から新版になるところで、外れているみたいですね。  
国王と大統領との相違を述べる問題<sup>15</sup>と、問題の解釈の問題<sup>16</sup>。それから3つの理由発見<sup>17</sup>、  
9数字の反唱<sup>18</sup>。

古市：いろいろ検証実験とかやってみたなかで、この鈴木ビネーと旧版のほうとの違いは  
何かといえば、この新版の鈴木ビネーは、72問までなんです。旧版のほうは76問なんです。  
4問、つまり何が省かれたかっていうのは、新版は2歳から18歳11カ月までで、途中の  
ところではしよったからです。これは、小宮先生たちの判断で、一つは、18歳ぐらいまで  
がとればそれで十分だろうと。先生方からすれば、(検査対象者である)子どもは幼児・  
児童の年齢のことを考えていらっしやった。それで、18歳11カ月までにしよう。もう一  
つは、問題としては悪くないだろうと思ったんですけど、はしよったのが、国王と大統  
領の問題。鈴木治太郎さんの時代は、使えたかもしれませんが、国王と大統領の違  
いっていても、時代が違っちゃいましたから。前と同じようなわけにはいなくなっ  
ちゃったんですよ。

—そうですね。代替の問題を用意するのではなく、はしよったほうが改訂から考えると良  
いとなったんですね。

### さらなる改訂の必要性和、協力者集めの問題

古市：これを発売しましてから、いろいろ電話をいただくようになったんです。新版の対  
象年齢の上限が18歳11カ月ですから。旧版はその上、成人までとなっていますね。

—ええ、はい。

---

<sup>15</sup> 鈴木治太郎『実際の個別的な智能測定法』、第62問(15～16歳)「国王と大統領との相違」  
のこと。「国王と大統領との間には、3つの重要な違いがあります。それは何々でしょうか」  
と教示される。

<sup>16</sup> 鈴木治太郎『実際の個別的な智能測定法』、第63問(16～17歳)「問題の解釈」のこと。  
2問から構成されるが、第1問目は「ある1人の男が、町はずれの森の中を歩いていたが、  
突然「びっくり」して立ち止まった。その男は、そこから一番近い交番所(発出所)へか  
けつけて「たった今木の枝からぶら下っているものを見た」といいました。何がぶら下  
っていたのでしょうか。」という質問である。

<sup>17</sup> 鈴木治太郎『実際の個別的な智能測定法』、第72問(20～21歳)「3つの理由発見」のこ  
と。2問から構成されるが、第1問目は「世の人が僅かなお金でペンとインクが買えるのに、  
たくさんのお金を費して「タイプライター」を使用するのはなぜか」という問いに対して  
3つの理由を説明する課題である。

<sup>18</sup> 鈴木治太郎『実際の個別的な智能測定法』、第76問(22～23歳)「9数字の反唱」のこと。  
9つのランダムに並べられた数字を聞き、聞いたのとは逆の順番で答える。

古市：お使いになった病院の先生とか、児童相談所の関係の発達障害の部門の研究機関のところからは、この上の年齢をどうしてつからないんだと電話が来ました。「これは、われわれが今まで使った検査で改訂版が出たので使いたいけれども、上の年齢がないと困るよ」と。それで、その声を今度は編集会議で先生方に伝えまして、もっともな話なので、(旧)鈴木ビネーと同じところまで問題を伸ばそうということで、今現在この76問まで問題を増やす作業をしています。

—さらに改訂をされているんですね。

古市：そうです、はい。さらに変えています。前回の編集会議でも、とにかく早く進めようと。ただ、さらにもっと上の年齢を知りたいという方々も多いんです。でも、もうその方々に申しあげているんです。それはおそらく無理だと思いますと。検証実験がたぶんとれないと。これだけもう個人情報のほうが厳しくなってきましたと。ですから、こうやって要望が来ますね。それでじゃあ先生、申し訳ないけれども、先生のところで、個人情報がありますから、名前も何もいりませんから、データだけとってもらえませんかと聞くと、ちょっとうちでは無理だ、ほかのところどこか頼んでくださいって。みんなそうおっしゃるんです。ですから、もうこの検証実験を、昔と同じような形でとるということは実質上駄目。それからごく一部をやってみましても、幼児やなんかのところの問題と違い、上(の年齢)はギャップが、非常な違いが出てまいりますから、中途半端な数(被検者数)をやっても信頼性に欠けて、とてもデータとしては使えないと思います。

—ウェクスラー式と同じぐらいの大規模なものになっていってしまいますね。

古市：あのウェクスラー方式でも、数的にはそんなに取れない、もうそういう時代になってきていますから。

—昔は学者が周りの小学校で声をかけて、すぐ対象者が集まったりしたみたいですよ。

今は標準化のための協力者集めにとても苦労されているとうかがいますね。

古市：昔は、ご理解ある校長先生のところなんかへ行くと「ああ、これは必要なことなんだからって」と言って、これでクラスの先生なんか「これを協力してやってくれ」って、「こういうもの必要なものだから」って、という時代があったんですよ。今はそういうようにはまったく、はい。難しいです。まあ大学生の年齢でしたら、著書の先生方や知っている先生のところの大学の機関でやってもらえるんですけども。もうその上の社会人のところなんかの例は、無理です。ですから、上のところは必要になってきていることは事実なんでしょうけれども、こういう検証や検査というものでデータを測るというよりも、尺度でだいたい目盛りで測っていくっていう方式をとっていかないと。そういうようなアバウトな尺度でも見ていけるようなそういう方式のものにちょっと考え方を考えていかないと、それだけの上の年齢はこれからの時代はちょっと難しいんじゃないかというふうに私どもは考えますけどもね。

—ニーズはあるけれども、現実的にちゃんと準備をして標準化した検査にしていくっていうのはたしかに難しそうですね。

古市：はい、ちょっとこれからの時代としては難しいだろうと思いますね。

### 標準化作業を行ったテスターたち

—鈴木ビネーの改訂のテスターというのは、誰がされているんですか？ 小宮先生のお弟子さんなどの先生方がされているのでしょうか。

古市：幸いにして置田先生とその置田先生とずっとやっていらっしゃった早大の仲間の方とか、あるいは小宮先生のところのお弟子さんのところでいらした、テスターもやってた仲間の方だとか、そういった方々がお手伝いいただきましたので、なんとかできましたけれど。大変です。学校のような機関じゃなくて、やはり子どもたちの知り合いの機関、例えば、一般の塾関係のところですか、そういうような機関やなんかいろんなつてを頼ってやらせてもらいましたけれども。やはり鈴木治太郎先生の鈴木ビネーがそれだけ評価されているのがあるなと思いますが、やはり今じゃ考えられませんが、この（旧）鈴木ビネーは1万数千名の実験をされておりましたから。これを、実際の検証実験で追っかけてやってみましたところ、幼児なんかでは（旧版のもの）ほとんど差がありませんでした。

—すごいですね。

古市：むしろ上のほうの年齢で、文章題なんかは、昔よりも今のほうがまだ低く出るぐらいで。さすがにやはり、これだけの数やっていらして、きちっとデータをとられた検査だなと思って驚きましたけれども、そういう面では助かりました。

—当時は、もちろんコンピューターもないところで、綿密なグラフを描いて分析していますよね。1万数千名という（標準化の）対象者は鈴木治太郎先生自身がいろいろなところに声をかけて集めたというような感じみたいですね。

古市：ええ、このお弟子さんたちは、それすべてでおやりになったらしいですね。

—すごい仕事、これは守る会がいるのもよく分かるなと思いました。

古市：しかもそれを、5つ玉のソロバンでやったんですからね。作業としては大変な作業だったと思いますよ。

### 検査用具の作成について

—新版の用具の絵は誰が描いたんですか。どうやって画家を探したりしたんだろうとかと。ずいぶんかわいらしい絵に変わっていて、昔のものとは全然違っていて。

古市：それは昔の絵は、とてもじゃないので。一応今どきのもので、出版関係でこういう絵なんかを専門にやるようなところがありますので、それは別にその機関に依頼してつくりました。

—なるほど。

古市：欠所発見の問題で、ちょっと笑い話になるかも知れませんが。ホルスタイン<sup>19</sup>、…

---

<sup>19</sup> 鈴木ビネー研究会『改訂版 鈴木ビネー知能検査法』、第19問（4～5歳）『絵の中の欠

…実際に実験やって、子どもから教わったんですよ。これ、初めお乳がなかったんです。そうしたら、子どもが、「お乳がない」って。これは北海道で実験やってもらったときに。—ああ。牛が。

古市：「お乳がない」と言ったんですよ。ホルスタインで、なんでお乳が……、ホルスタインにはお乳があるに決まっていると。

—そうですね。

古市：ははあ。それでそういうことが全然分からなかったものですから。それでこれはいかんと思ってまた作ったんです、そういうような笑い話もありますけれども。

—ええ、面白いですね、子どもが改訂の手伝いをしたんですね。

### 美醜の判定の問題作成

古市：それから、この美醜ですね<sup>20</sup>。

—すごいですね、これはどうやって考えられたんですか？

古市：悩んだんですよ。編集会議でも3回か4回喧々囂々<sup>けんけんごうごう</sup>言っているかもしれないからと、いろんな問題の美醜を使って、例えば砂浜の白砂青松のきれいな砂浜の海岸とか、ごみがいっぱい流れている海岸だとか、というものにいくつかのデータをつくりまして、検証実験を連日やったんです。で、検証実験やっているなかで、一番データの的に良いのは、この花の差だったものですから。ただこの花も、今から申し上げると大変だったんです。同じ花のところでも過程のところを、こう、じーっと枯れていく状況を見合っただけやらないから。その写真屋にも、無理言ってこういうのは何時間ごろ、これは駄目だとか、というのをいろいろ何枚も何枚も撮ってですね。

—同じ花を枯れていく過程を撮っていったんですね、何回も。

古市：そうです。問題をつくっていく上でのいろんな苦労話でございますけれども。まあ絵はもうちょっと上手なのがいなかったのかとかといろいろ言われるんですけど。今どきのものに一応変えさせていただいたというのがあります。

—なるほど。この美醜の項目が残っているのが、鈴木ビネーの特徴ですよ。田中ビネーのほうは、もう初めから抜かれていますものね。

古市：ええ、これはね、美醜というのは私もちょっとこれは分かりませんが、置田先生も個人でいろいろ現場のところから依頼があって、このなかの特に美醜について、話をちよっと講演でしてくれないかというところも何件かあったらしくてですね。

—そうですね。

古市：そうならば、この鈴木ビネーの大きな特色として、美醜というのは、問題をほかの

---

所発見』のこと。①に「尾のない牛」の絵を提示する課題がある。

<sup>20</sup> 鈴木ビネー研究会『改訂版 鈴木ビネー知能検査法』、第12問（3～4歳）『美の比較』のこと。一対の花の写真を見せて、どちらが美しいかを問う課題。旧鈴木ビネーである鈴木治太郎『実際的個別智能測定法』では、第12問（3～4歳）『美の比較』として、一対の女性の絵が提示される課題となっている。

ものに変えてでも、美醜という問題を残したいというのが編集会議でのポイントでした。それで苦労もあったんです。初めはなくそうということにしたんですけれども、どうしてもこれを残したいということで、それで。

—そこまでして残すことにした理由は何だったんでしょうかね。

古市：やはり鈴木ビネーにとっては、この美醜は、大きな一つの特色の一つであるという話を先生方はされていましたが。詳しいことまではどうしてというのは私自身はちょっとよく分からないんですけども、どうしても残そうという話になったんですね。

—鈴木ビネーを見てみると、美醜が今もこのような形で残っていて、そこが特徴かなと思っていましたので、なぜだか不思議に思います。

古市：1度電話があったことがあるのですが、京都の K 式発達検査っていうのがございますね。あちらの先生の一人が、鈴木ビネーの美醜について、取り上げた一つの経緯みたいなものを見て、ちょっと教えてほしいということで、メールですけれども、お答えしたことがありました。総合的にはやはり、美醜の問題というのはどうして残されたんですかって言われたから、「編集、この著者で、鈴木ビネーの代表的な特色の問題の一つであるから、この内容を同じ問題として出版することは無理なので、代替の問題として残そうということになりましたので」というお答えしか私もできなかったんですけども。まあそんな状況でした。

### 著作権の帰属

古市：あとから話を聞いた話なのですが。実は、田中ビネーを出されているところの、もう引退されましたけど、そこの社長さんですとか、そういった方々から、どうして鈴木ビネーがすんなりオーケーと言ったんだと。われわれが行ったときには難しかったのにと。「なんかマレーシアに行っちゃったんじゃないか」って言うから、「いや、たかだか4～5年あちらに行っていたらしくて、戻っていたらしいですよ」と。タイミングがまあ悪いところは悪かったんでしょうし、まあ私どもとすればたまたま、鈴木ビネーを守る会、和神の会、タブロイド版の新聞を出されておりましたけどね。それが鈴木ビネーを守る会みたいなものになって、一部別名だったらしいですけども、その方々ももうこれでだいたい引退されておりましたし、というような状況のときに、訳の分からない私が行ったんですけども、まあもうわれわれの時代が終わったんだから、好きにしたらという状況になったんじゃないでしょうか。

—面白いですね、なんか縁があったんですね（笑）。そういえば、著作権というのはその鈴木治夫先生のところにあるのですか？ 小宮先生のところに、改訂版はあるんでしょうか。

古市：今度の改訂版については、小宮先生方のところにあります。ですから、一応私どものほうとしては、……鈴木先生が、著作権を持っていらっしゃるというのはご存じですよ。

—はい。

古市：前の鈴木ビネーの、鈴木（治太郎）先生が亡くなられて、来年か再来年なんですよ、著作権が切れるのが。で、私どもとしては、来年か再来年までの鈴木ビネーの版權が切れるまでは一応やはり版權としての著作権の印税分を今お支払いしています。けれども、一応鈴木先生の著作権がなくなりましたら、それで終わりますけれども。今の改訂版についての著作権は、今度の小宮先生をはじめ、それは先生方のところで発生いたしますので、その先生方のところが著作権ですね、はい。

### 知能観

—最後に、知能観をうかがいたいのですが、古市さんにとって、知能とはどんなものだと思いますか？

古市：私は、一番言葉として好きなのは、今のウェクスラー法を研究されています、学芸大の上野一彦先生<sup>21</sup>のもでずっと勉強をしてきたんですけど。上野先生は講演をやるたびに、今はあんまりおっしゃってないかもしれませんが、「……こういうようなものを勉強するときに、知能という言葉は僕はあまり好きじゃありません。知能っていうと、何か人がそれぞれのとり方が、誤解があって、僕は嫌なんです。僕の好きな言葉は知恵、知恵という言葉です。知恵ならばもう少しこれについてかわいがってもらえる、考えてもらえるんじゃないかなという、親しみのある言葉になりませんか。知能という言葉よりも僕は知恵という言葉のほうが。そういう感覚で知能というのは考えていってもらえるのがいんじゃないか」ということを、上野一彦さんはよく講演でおっしゃって。「ああ、いい言葉だな」と。知能というとなんかこう決められたような。でも知恵というのは、誰でもが自分なりに発揮できるものだから、もう少し親しみのある言葉になるから。純粋には知能と知恵って違うかもしれないけれど、でも、われわれのこういうようなもの、働くのは知恵的なものじゃないかなと。

### 鈴木ビネーの利点

古市：日本文化（科学社）でやっていたウェクスラー法のものや田中ビネーはよく知っていたんですけども、鈴木ビネーをやったときに、「へえ、こんなに違うんだ」と思った。置田先生に、「先生、どうして田中ビネーではなくて、鈴木ビネーなんですか？」って言ったら、置田先生が必ず言うのは、「鈴木ビネーは古市さん、非常に入念に出来た検査です」っておっしゃるんですね。それで、私も思ったんですけど、多くの問題が時間配分がないんですね。私は初め、日本文化科学社で慣れた検査なんかというと、もう「はい、やめて」ってやる。「こんな子どもたちに対してこんな失礼なやり方はありません。もう少しで分かるかもというところで、終わっているかもしれません。でも、そこで終わらしちゃう。

---

<sup>21</sup> 上野一彦、1943-。東京大学大学院修了後、東京大学助手を経て東京学芸大学講師、助教授、1990年に教授着任。2009年同大学名誉教授。大学入試センター特任教授、日本LD学会会長ほか。専門は特別支援教育、発達障害（上野、2017）

終わらしちゃ駄目なのよ。時間なんか、かまわず考える。考えてもあきらめてくるならそれでいいけども、考えている子には考えさせず、でもその子は一生懸命考えようとしているんじゃない。でも検査の点数はきちっとしなけりゃ駄目よ、もちろん。検査ってそういうもんじゃないの」っていうことを置田先生はおっしゃる。「だから私は、鈴木ビネーっていう検査に、一言で言うとおぼれたんです」と。そうでない、こういう検査というのはただスピードで、たしかにそういうタイプの要領がいいという、その子は知能が高い。「本当に高いのか？」と言ったら「そうじゃないでしょう」ということを、置田先生がおっしゃいました。「あ、なるほど、鈴木ビネーっていうのはそういうことで愛されてきたんだな」ということは私も分かりましたけれども、やはりこういう集団式の検査なんかは、時間でパッパッパッとやりますから、スピード感に慣れている子どもたちは高い結果が出てきますけれども、じっくり物事をもう少し時間を与えれば考えていけるのにといい子には、その子の知能があるわけですね、知的能力が。

—うんうん。

古市：その子にはたまたまその検査が向いてなかっただけの話であって、その子の知能が低いとは言えないわけですね。ですから、そういう特色がそれぞれあるわけですから。集団的なペーパーテストで「はい、あなたの知能はこの子は高いです」「低いです」って判断していくやり方は、やはり良くないんじゃないかという流れは、当然来るだろうと思っていました。あれで知能を測るという限界が、どうしてもあるということで。

一元々のビネーの検査では、たしか時間制限などないですよ。原版を見ると。アメリカに渡って軍隊徴兵のときに上官の命令にきっちりと従えるっていうところから導入されていますものね、時間制限をこう素早くやるっていうことは。

古市：特にアメリカで、B式タイプの検査で一気に大量に測れるということで人気が出たんでしょうけども。あれが果たして純粋な知能検査と言えるかって言ったらば、便利だったかもしれませんが、正しい知能の測り方か、と言ったらちょっと疑問を感じるということになってきちゃうだろうと思いますね。私もそれはそのように感じます。実際に、販売していた立場から言いますと、おかしいんですけどね。

—面白い（笑）。仕事は仕事ですものね、販売はする必要があると。

古市：そう、ですから、そこに、矛盾はたしかにありますから。私の晩年のころに、集団テストの採用がどんどん出たときに、日本心理適性研究所で所長やっていた東大の肥田野直<sup>22</sup>先生が「これからは、古市さん、個別検査、今までのああいう検査っていうのは、当然なくなって、寿命になるだろうけれども、これからはやはり個別検査が重要になってくるから、個別検査についてもっとお宅の会社のところも努力勉強して開発されたほうが

---

<sup>22</sup> 肥田野直、1920—。1943年東京帝国大学文学部心理学科卒業。津田塾大学、東京女子大学を経て1966年東京大学教育学部教授、1981年同大学名誉教授。大学入試センター教授、放送大学教授。2000年から日本心理適性研究所所長。専門は教育心理学、測定と評価（大泉、2003）

いいですよ」というようなことを肥田野先生から言われたことありますけれど、案の定やっぱりそうになって来ました。

一本日は長時間、本当にありがとうございました。

## おわりに

本研究では、鈴木ビネーの改訂版を出版した古市出版、古市龍雄に行ったインタビューを報告した。インタビューでは、鈴木ビネー改訂に至るまでの道筋、改訂作業における問題の選定の工夫、検証実験と編集会議の様子、知能観が語られた。

知能検査改訂の歴史という視点から述べると、鈴木ビネーの改訂は、少数精鋭の努力と幸運によって成し遂げられた仕事の性質に特徴がある。インタビューで古市は、鈴木ビネーの改訂が偶然であったとして次のように説明している。過去何社も出版社が改訂を申し入れたにもかかわらず、著作権を持つ鈴木治太郎の遺族と連絡が取れなかったり、鈴木治太郎と共に鈴木ビネーを作り保存にあっていた和神の会から許可が得られなかったりして改訂は実現しなかった。しかし古市は、偶然在宅した遺族と、高齢となった和神の会の会員から許可を得ることが出来た。改訂の権利を得た後も、検査出版のための財源の問題、検査項目の選定など多くの困難が存在したが、心理学者の小宮、ベテランテスターの置田、出版社員の古市らの努力と献身により改訂が実現された。鈴木・鈴木・安齋（2016）は、知能検査は改訂を重ねるにつれて、個人のつながりによる共同作業から専門家集団による組織的作業に変化していくものであり、このような人や世代を超えた継承と発展のシステムが知能検査の改訂の背景に存在すると指摘した。しかし本研究のインタビューをみると、鈴木ビネーの改訂作業を進めたのは、個人的なつながりを持つ少数の者たちの共同作業と献身であった。ここでは、日本で愛用されてきた鈴木ビネーの改訂を使命とした学者魂、知能検査にかける情熱が、知能検査の改訂と継承を支えたといえる。

本研究のインタビューは、出版社が知能検査の発展に大きな力となったことを示す上でも非常に貴重なものと考えられる。古市は自分が改訂に携わった経緯について「(辞退を)お話をさせていただいたら、小宮先生から『入れ』と(言われたので加わった)」と、謙虚に表現している。だが、著作権取得のために奔走したこと、個人資産を使って検査を出版したこと、販売元の岡田心理センターと協力関係を作ったことなど、表面には出なくとも古市が作業に加わらなければ実現不可能であったことは多い。古市は、日本文化科学社社員時代に茂木の勧めで心理学を学んだと話し、心理学者の言葉を借りながら知能観を語るほどに、知能検査の仕事に関心と誇りを持っていた。知能検査の発展の歴史を考える際には、背景に、古市のような出版社員の尽力が存在することをインタビューは伝えている。

さらに本研究のインタビューは、現代における知能検査改訂作業の難しさを伝えている意味でも歴史的資料として価値がある。インタビューの最後に、古市は、知能検査開発の際の検査協力者確保が困難となったことについて、「(成人級の問題を作ってほしいという要望に対して)それはおそらく無理だと思いますと。検証実験がたぶんとれないと。これ

だけでも個人情報のほうが厳しくなってきますと。」「大変です。学校のような機関じゃなくて、やはり子どもたちの知り合いの機関、例えば、一般の塾関係のところですか、そういうような機関やなんかいろんなつてを頼ってやらせてもらいましたけれども。」と述べている。時代の変化に合わせて知能検査の内容が変化することは知られているが、改訂に協力する人々の考え方の変化も、知能検査の改訂に影響を与えている。今後、古市が述べるように、検査協力者確保の困難が契機となって知能検査の作成手順が変わる可能性もある。これも知能検査への時代の変化の影響の一つとみる事が出来るだろう。

本研究のインタビューは、鈴木ビネー改訂をテーマとしたものだが、知能検査開発に携わる出版社員の尽力や、知能検査開発に影響を与える世論の変化を示す資料でもある。表面には出なくても大きな影響を与える人物や世論に支えられて、知能検査が発展してきたことを本研究は示している。

## 謝辞

古市龍雄氏には、長時間のインタビューにご協力をいただいた。心理検査開発における出版社の役割について不案内な著者に対し、非常に丁寧にご教示いただいた。心より感謝の意を表します。

## <出典>

- 石川衣紀・高橋智 (2008). 大阪市視学・鈴木治太郎と知能測定法標準化の実践：1920年代を中心に、東京学芸大学紀要総合教育科学系, 59, 363-378
- 上野一彦 (2017). プロフィール：カズ先生のホームページ<<https://www.u-kaz.com/プロフィール/>> (2017年2月21日)
- 大泉溥編 (2003). 日本心理学者事典, クレス出版
- 健康科学大学 (2016). 教員紹介：健康科学部福祉心理学科小宮三彌<[https://www.kenkoudai.ac.jp/modules/waffle0/index.php?t\\_m=ddcommon\\_view&id=35&t\\_dd=waffle0\\_data3](https://www.kenkoudai.ac.jp/modules/waffle0/index.php?t_m=ddcommon_view&id=35&t_dd=waffle0_data3)> (2016年9月20日)
- 佐藤達哉・溝口元 (編著) (1997). 通史日本の心理学, 北大路書房
- 鈴木朋子 (2003). 久保良英によるビネー式知能検査の改訂, 心理学史・心理学論, 5, 1-13
- 鈴木朋子 (2016). 医師による知能検査の開発—東京帝国大学時代と東京大学時代において— 心理学史・心理学論 Vol.16/17, 25-36
- 鈴木朋子、岡村宏美、木下利彦 (2009). 三田谷啓によるビネ式知能検査の改訂, 心理学史・心理学論, Vol.10/11, 1-10
- 鈴木朋子, 鈴木聡志, 安齋順子 (2016). ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景：品川二郎・孝子へのインタビューから, 横浜国立大学教育人間科学部紀要 II 人文科学, 18, 1-18
- ナカニシヤ出版 (2016). 塩見邦雄<<http://www.nakanishiya.co.jp/author/a64469.html>>

(2016年9月20日)

中村淳子・大川一郎 (2003). 田中ビネー知能検査開発の歴史, 立命館人間科学研究, 6, 93-111

日本文化科学社 (2016). 会社案内：沿革<<http://www.nichibun.co.jp/nbk/history.html>> (2016年9月20日)

古市出版 (2016). 執筆者：末岡一伯<<http://furuiti-book.com/?p=44>> (2016年9月20日)

古市出版 (2016). 執筆者：置田幸子<<http://furuiti-book.com/?p=45>> (2016年9月20日)

ブルーレディオドットコム (2013). 源川瑠々子の星空の歌 Today'sGuest <<http://www.blue-radio.com/program/hoshizora/index.aspx?genrename=130404>> (2014年4月22日)

大和大学 (2016). 教員一覧：教育学部 塩見邦雄 <[http://www.yamato-u.ac.jp/research/database/kunio\\_shiomi.html](http://www.yamato-u.ac.jp/research/database/kunio_shiomi.html)> (2016年9月20日)